

SNBL News

SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES, LTD.
<https://www.snbl.co.jp/>



令和 **Vol.4** (2022)

Contents

- ・ごあいさつ
- ・SNBLの取組み
GLP適合性調査
- ・セミナー報告
SNBLセミナー2022
- ・寄稿
高品質で迅速なデータの提供を目指して
新規モダリティ対応の促進
- ・The 49th Annual Meeting of
The Japanese Society of Toxicology
参加報告
- ・サービスマニュー
LC-MS/MSを用いた新規モダリティの
バイオアナリシス試験受託業務
- ・ステークホルダーに寄り添う取組み
会社案内を兼ねた
「株主通信」の作成



SHIN NIPPON BIOMEDICAL LABORATORIES, LTD.

株式会社新日本科学

<https://www.snbl.co.jp/> E-mail: info@snbl.co.jp



東京本社

〒104-0044 東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー 28階
TEL.03-5565-5001 FAX.03-5565-6160

本店/安全性研究所

〒891-1394 鹿児島県鹿児島市宮之浦町2438
TEL.099-294-2600 FAX.099-294-3619

薬物代謝分析センター

〒642-0017 和歌山県海南市南赤坂16-1 海南インテリジェントパーク内
TEL.073-483-8881 FAX.073-483-7377

大阪支社

〒541-0044 大阪市中央区伏見町2-1-1 三井住友銀行高麗橋ビル
TEL.06-6233-8432 FAX.06-6233-8433



株式会社新日本科学
専務取締役
前臨床カンパニー President
角崎英志
Hideshi Tsusaki

皆様には平素よりひとかたならぬご厚情を賜り心よりお礼申し上げます。夏場の新型コロナウイルス変異株の流行時には、事業継続を第一に感染拡大防止に取り組み、弊社グループでは大きな影響なく受託試験を実施することが出来ました。お客様各位におかれましては、ご不便をおかけすることもある中、多大なご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございました。

弊社グループは2022年3月期も前期比増収増益となり、2023年3月期上半期（2022年4～9月度）も引き続き好調に推移しました。一方で、高稼働状況が継続しましたために、ご希望の実施時期等に試験が実施出来なかったこともあったように聞き及んでおります。このような状況を踏まえ、2021年後半より施設を増設して参りました。霊長類試験室の一部は今夏より試験に供しております。本年末には大規模な研究棟の建築を開始し、2024年春の竣工を目指しております。さらに、今夏は弊社グループにイナリサーチを迎えまして、お客様のご要望にさらに寄り添うことの出来る体制構築も進めております。弊社鹿児島安全性研究所、和歌山薬物代謝分析センターとともに引き続きご愛顧頂けますようお願い申し上げます。

今後も製薬業界の皆様のご期待に応えられるCROとして役職員一同、サービス品質の向上に励んで参りますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。学会の各種集まりの方も対面が増えて参りました。皆様と拝眉の上で挨拶させて頂ける機会を楽しみにしております。最後になりましたが、皆様のご健康とご多幸を祈念しまして、巻頭の挨拶とさせていただきます。



株式会社新日本科学
常務取締役
前臨床カンパニー Vice President
永田一郎
Ichiro Nagata

お客様各位におかれましては、ますますご隆昌のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

本年4月より前臨床カンパニー Vice Presidentに着任いたしました、永田一郎でございます。

世の中ではVUCAの流れが日に日にスピードを増してきており、どの業界もこれまで以上に戦略、戦術の柔軟性が求められております。製薬業界におきましても、より高度な研究や様々なプラットフォーム技術の開発によるモダリティの多様化や開発方法の複雑化が進んでいることは、皆様が実感されていらっしゃる通りかと存じます。このような中、当社非臨床事業は、世の中の潮流をいち早く察知し、お客様のご要望にお応えできる柔軟な対応力と、それを実現する技術力の継続的な向上を中長期目標の一つに掲げ、数々の新しい社内プロジェクトに取り組んでおります。皆様のパートナーとしてこれまで以上の安心と信頼を提供できるよう、精進して参ります。

当社グループは、皆様のお力添えのおかげで、これまで着実な成長を遂げることができ、今年9月に創業65周年を迎えることができました。社員一同、この場をお借りして心より感謝申し上げます。今後とも、まずは100周年を目指し、皆様の末永いパートナーとしてあり続けられるよう、新日本科学社員一同、尽力して参ります。引き続き温かいご支援を賜りますよう、よろしく申し上げます。

年末に向かい何かとご多忙のことと存じますが、お客様各位の更なるご発展を心より祈り申し上げます。

GLP適合性調査

SNBLの
取組み

弊社鹿児島の実験動物施設は、PMDAより令和4年6月15日付で「医薬品GLP」、「医療機器GLP」、「再生医療等製品GLP」の適合確認書を受領しました。

日頃より安全性研究所をお引き立ていただいております各社様には、試験の適正実施にご協力いただいておりますこと、深く感謝申し上げます。

GLP適合性調査は2022年2月10日に施設資料のリモート調査、翌週2月14日～18日に実地調査が行われました。新型コロナウイルスのオミクロン株が猛威を振るう中での実施となりましたので、弊社主要スタッフは実地調査前にPCR検査を行い、全員陰性の結果を得て、実地調査当日を迎えました。

GLP調査プロジェクト
安全性評価部
坂本和仁 Kazuhito Sakamoto

GLP適合性調査の概略

適用規則： 医薬品GLP(13回目)、医療機器GLP(6回目)、再生医療等製品GLP(3回目)
調査日程： 2022年2月10日(リモート調査)、2月14日～18日(実地調査)
調査官： 4名
調査施設： 安全性研究所(鹿児島)
対象試験： 1169試験(過去3年間に最終化したGLP適用試験)
Study Audit： 自己調査形式で7試験(医薬品4、医療機器2、再生医療等製品1)
進行中試験の調査： インタビュー形式で1試験(医薬品)

中止試験の調査： 自己調査形式で12試験
ラボツアー： 霊長類、イヌ、ブタ、ラット、マウス、ウサギの動物施設、被験物質、分析、臨床検査、バイオアナリシス、病理、遺伝毒性、安全性薬理の試験操作区域、運営管理者室、資料保存施設、信頼性保証部門室等を最大3組に分かれて調査
CSV調査： 5システム(過去3年間の新規導入システムから選択)

今回のGLP適合性調査は、コロナ禍での対応として接触人数を制限した中での実施となりました。ラボツアー及びStudy Auditでは、我々の対応者は最大3名の制限がありましたが、Web会議ツールを活用し、多人数が同時に調査へ関与することができ、円滑に調査が進みました。逸脱事項もなく、GLP適合の評価を得ることができました。今回の調査では、2022年1月に導入しました「電子ファイ

ル署名・保存システム」のCSV調査も受け、電子署名(DocuSign)や電子ファイルの保存等も調査対象となりました。今後、試験計画書、試験計画書変更書から電子署名の適用を広げて参ります。安全性研究所は、新しい仕組みを取り入れながら適正な試験実施を行い、皆様に貢献して参ります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



SNBL Seminar 2022

SNBLセミナー
2022

実験動物としてのカニクイザル

2022年2月25日に、Webinar形式にてSNBLセミナー 2022を開催しました。今回は「実験動物としてのカニクイザル」をメインテーマに、以下の3名の先生方に御講演いただきました。

営業部
軸菌亀也
Tatsuya Jikuzono

遺伝子改変 カニクイザルを用いた ヒト疾患モデリング

滋賀医科大学
動物生命科学研究センター
依馬正次 教授
Masatsugu Ema



カニクイザルにおける 脳・神経系を標的とした 投与及び脳脊髄液採取

株式会社新日本科学
安全性研究所 安全性評価部
吉川哲也
Tetsuya Yoshikawa



カニクイザルにおける 中枢機能評価

株式会社新日本科学
安全性研究所 薬効薬理研究部
林田健一郎
Kenichiro Hayashida



本年は対面での開催を目指しておりましたが、感染拡大の最中のため、昨年に続いてWebinar形式での開催となりましたが、200名を超える方々にご参加いただくことができました。カニクイザルを用いた実験の有用性と各種の実験技術に関する活発なディスカッションが行われ、大きな混乱もなく、盛況のなか無事終了できました。先生方、運営側のスタッフ含め皆様に、厚く御礼申し上げます。バックナンバー等のご希望は、当社営業担当へお気軽にお声がけください。

次回予告

2022年 11/25 [金]
13:00～17:00 (4h)

テーマ：
多様化するバイオ医薬品におけるバイオアナリシス
場所：
TKPガーデンシティ Premium品川 ホール6A [品川駅 徒歩4分]

質量分析を用いた タンパク質量量の ノウハウと最新動向

熊本大学
大槻純男 教授
Sumio Ohtsuki



LC-MS/MSを用いた カニクイザル組織中の 核酸定量法開発

株式会社新日本科学
薬物代謝分析センター 第一研究室
廣渡一成
Kazunari Hirowatari



ddPCR, qPCRにおける バリデーションの 事例紹介

株式会社新日本科学
安全性研究所 安全性評価部
有村由貴子
Yukiko Arimura



ICH M10ガイドラインに 対応したバリデーションと 実試料分析の留意点

株式会社新日本科学
薬物代謝分析センター/安全性研究所
家木克典 / 野村達希
Katsunori Ieki / Tatsuki Nomura



営業部
中村 剛
Takeshi Nakamura



第49回日本毒性学会学術年会 参加報告

2022年6月30日から7月2日まで、北海道の札幌コンベンションセンターで開催されました第49回日本毒性学会学術年会にて、ブース展示、シンポジウム、2演題のランチョンセミナー、ポスター発表を行いました。
コロナ禍であり遠方での開催ではございましたが、多くの方にご来訪いただきまして誠にありがとうございました。

営業部
福山稔之
Toshiyuki Fukuyama

Symposium



安全性研究所安全性評価部
眼科検査研究室
荒木智陽
Tomoaki Araki



新規モダリティ医薬品に活用される 硝子体内・網膜下投与技術と眼毒性評価

視覚に大きな影響を与え、QOLを著しく損ねる網膜疾患に対して、新規モダリティ医薬品の研究開発が盛んに行われています。近年の網膜疾患の治療には、網膜の標的細胞への薬物/細胞の送達を困難にする血液網膜関門の関与を受けない硝子体内投与や網膜下投与が注目されています。一方でこれらの眼内投与手技には、外傷や眼内の炎症を起こすリスクがあり、安全性試験の実施においては眼に関する正しい知識と確立された手技が求められます。今回は、これら眼内投与の手技や注意点を紹介するとともに、眼毒性評価の概要や各種眼科的検査の有用性についても解説しました。



The 49th Annual Meeting of The Japanese Society of Toxicology

Luncheon Seminar



安全性研究所 安全性評価部
有馬昭宏
Akihiro Arima

幼若動物を用いた 安全性試験の実際



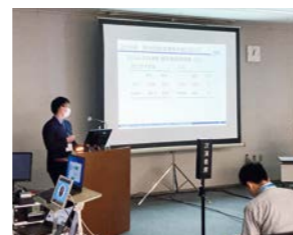
ICH S11ガイドラインが2020年に施行されましたが、ウェイトオブエビデンスの考え方に基づいて試験実施を判断し、ケースバイケースで適切な試験デザインを開発者側が立案するのは難しい事があります。私たちに寄せられる問い合わせ（投与開始日齢、投与期間、投与経路、採血量、使用動物数、検査項目）の中には、ガイドラインに即していなかったり、実現が難しい試験デザインが含まれていたりします。そこで今回は、出来るだけ実験施設の現場目線で幼若動物を用いた試験を切り取り、げっ歯類及びカニクイザルの幼若動物を用いた安全性試験の実際について、多くの実例と背景データを用いて紹介しました。

Luncheon Seminar



安全性研究所 実験動物管理部
川島良介
Ryosuke Kawashima

ソーシャルハウジングと アニマルウェルフェアに おける最近の取り組み

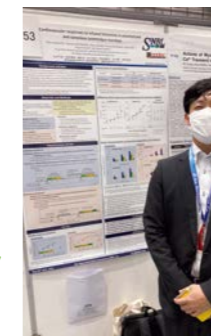


2011年にILAR Guide 第8版が発行されて以降、ソーシャルハウジングが標準飼育方法として求められています。4年前の2018年、まだ日本においてはシングルハウジングが標準でしたが、第45回日本毒性学会のランチョンセミナーで我々はソーシャルハウジングを標準とすると宣言しました。そして今回、この4年間でのソーシャルハウジングの試験数の変化を中心に、ソーシャルハウジングの実際、そして近年関心が高まっているアニマルウェルフェアの取り組みを紹介しました。

Poster Presentation

安全性研究所安全性評価部
第二毒性評価室
山下 諒
Ryo Yamashita

麻酔下及び覚醒下カニクイザル におけるヒスタミン静脈内投与 による心循環反応

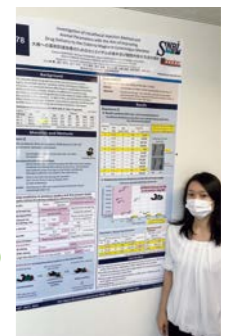


近年、前臨床試験においてもバイオ医薬品の問い合わせが増加しております。臨床における抗体医薬などを投与する場合、過敏性反応等の予防として抗ヒスタミン剤等の前投与を実施しています。今回、麻酔下及び覚醒下でのヒスタミン静脈内投与のカニクイザルに対してヒスタミン受容体拮抗薬であるジフェンヒドラミン及びラニチジン投与を実施しました。その結果、血漿中ヒスタミン濃度の上昇により、心拍数と心収縮力の増加がみとめられました。このヒスタミンによる心拍数と心収縮力の増加は主にH1、H2受容体を介し、一部にはカテコラミンリリースを介することを報告しました。今回の学会に参加でき、様々な毒性学に触れられ、とても貴重な経験になりました。

Poster Presentation

安全性研究所安全性評価部
第一毒性評価室
小林 薫
Kaoru Kobayashi

大槽への薬剤到達改善のための カニクイザルの条件及び 髄腔内投与方法の検討



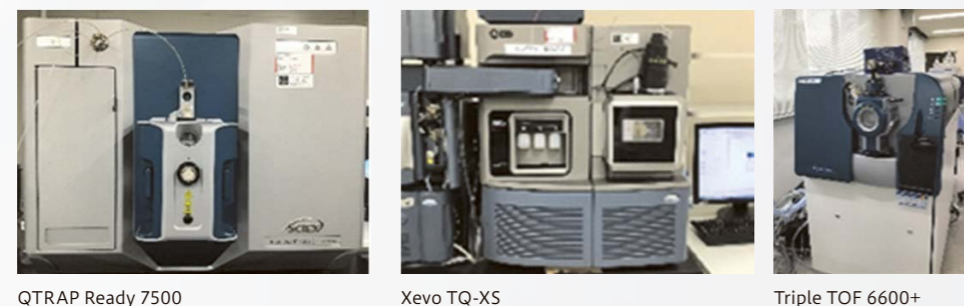
カニクイザルにおける腰部髄腔内投与後に、大槽付近にまで薬剤が届かない事例が当社実施の試験で複数みられ、また他施設の論文においても同様の報告がされている状況であり、お客様からも投与方法の最適条件を望む声が多くありました。状況を改善するためチームで議論を重ね、投与方法のうち麻酔薬、呼吸管理、投与速度、事前のCSF除去、動物の姿勢といった項目について最適と思われる条件を選択しました。また、この投与方法で動物の体重にも着目して実験を重ね、高率で大槽に薬物を送達する条件を見つけました。

LC-MS/MSを用いた 新規モダリティの バイオアナリシス試験受託業務

当社では低分子医薬品はもちろん、タンパク質や核酸といった新規モダリティをターゲットとしたLC-MS/MS分析の受託サービスを展開しています。今回は、タンパク質と核酸のLC-MS/MS分析のサービス内容の一部についてご紹介します。

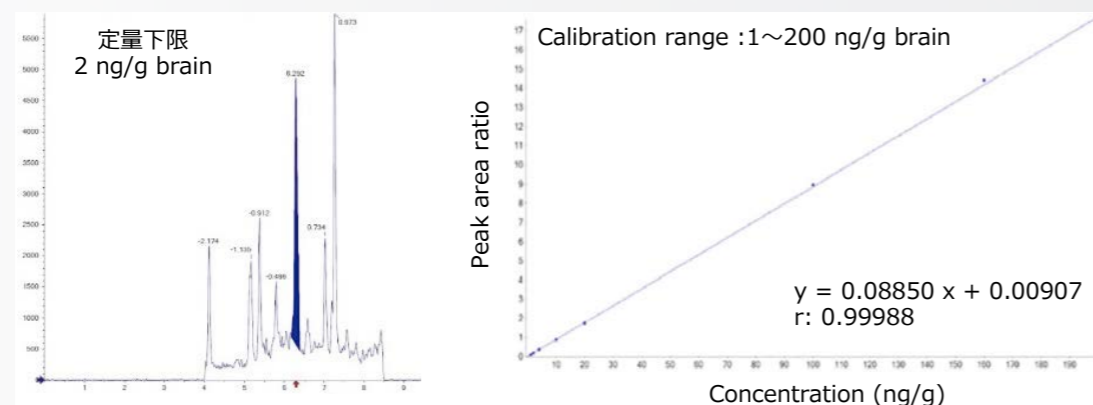
薬物代謝分析センター
家木克典
Katsunori Ieki

図1 当社で保有する新規モダリティ分析に対応する質量分析計の例



当社は、LC-MS/MSを40台以上保有し、AB SCIEX社製最高感度の四重極質量分析計であるQTRAP Ready 7500 (2台)をはじめ新規モダリティの分析に対応した機種を多数取り揃えています(図1)。これらのLC-MS/MSを駆使して、よりスピーディーに、高感度かつ選択的に目的の化合物を分析することが可能です(図2)。

図2 QTRAP Ready 7500を用いたカニクイザル脳中の核酸医薬品の定量分析



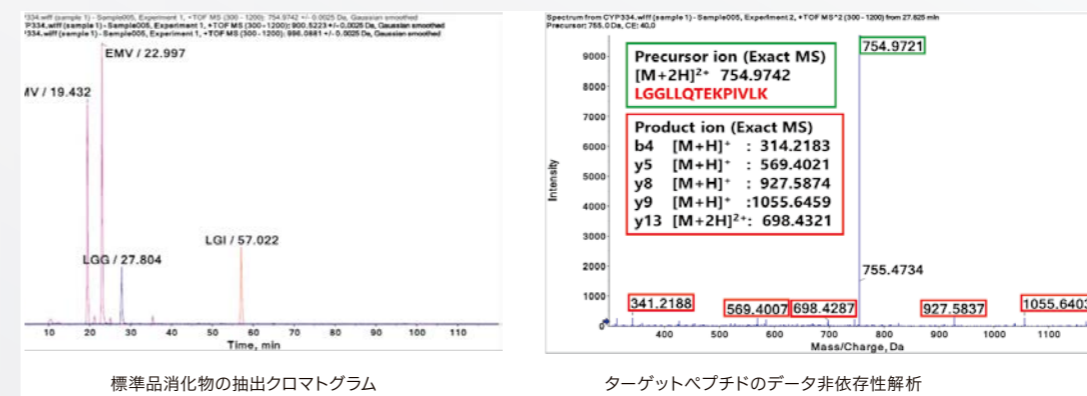
Service Menu

Bioanalytical Test

タンパク質(抗体を含む)のLC-MS/MS分析

精密質量分析が可能な飛行時間型質量分析計(例えば、Triple TOF 6600+, 図1)を利用してタンパク質の消化断片のスペクトルを取得し、in silicoで解析したデータと照合してターゲットペプチドを選定します(図3)。定量分析のためのターゲットペプチド決定後は、当社にてペプチド標品(内部標準物質)の代理発注を行い、標品入手後に定量法の開発を行います。定量法の開発においては、安定してより高感度にターゲットペプチドを検出するために、酵素消化やペプチド精製といった前処理の最適化やLC-MS/MS分析条件のチューニングを行います。より選択的に精製するために、前処理に免疫沈降を実施することも可能です。

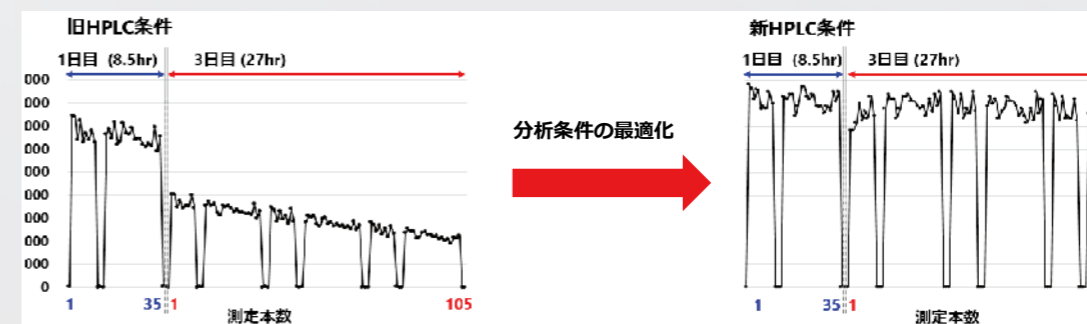
図3 Triple TOF 6600+を用いたペプチド断片の定性分析



核酸のLC-MS/MS分析

核酸医薬品については、組織への蓄積が認められることから、組織中の薬物濃度のモニタリングを求められることがあります。当社では、血漿以外に、脳、肝臓、腎臓、脾臓、筋肉、胸腺、卵巣、精巣、子宮、小腸など組織についての濃度分析の実績があり、各種組織からの安定した回収方法を提案します。分析法の開発時には、核酸のLC-MS/MS分析でしばしば問題となるキャリーオーバーや、分析内・分析間で生じる感度低下などの対策を含めLC-MS/MS分析条件のチューニングを実施します(図4)。また、飛行時間型質量分析計を用いて、代謝物検索を実施することも可能です。

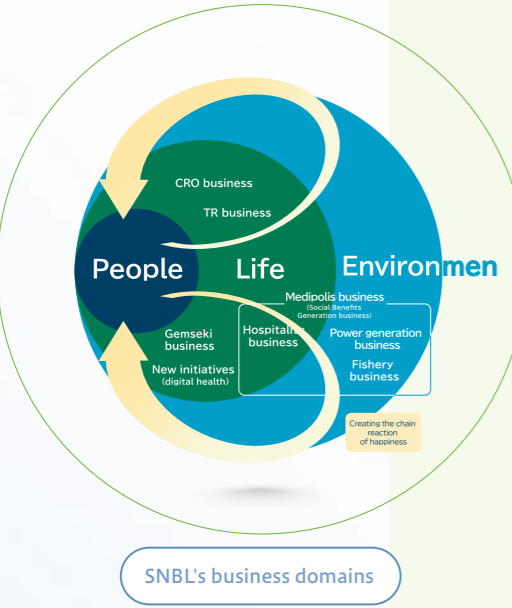
図4 核酸分析の感度低下対策効果



定量法が確立された後は、ICH M10ガイドラインに従って分析法のバリデーションを行い、検証された分析法により正確な実試料濃度分析を実施します。新規モダリティの分析研究や受託業務の実績がある専門のスタッフが、化合物の特性、お客様のご希望に応じて個別に対応しますので、是非お気軽にお問い合わせください。

会社案内を兼ねた「株主通信」の作成

ステークホルダーに
寄り添う取組み



SNBL REPORT 株主通信 2021.4.1 - 2022.3.31

独自の成長戦略に基づいて行ってきた競争優位性を構築する施策が実を結びつつあると、手ごたえを感じています。

代表取締役社長 永田 良一

2022年3月期の業績についてご説明いたします。

2022年3月期の業績は、主力のCRO事業が14.1%引上りの27.5%増となり、利益はすべて過去最高となりました。医薬品業界では、COVID-19に対するワクチンや治療薬の研究開発が過半数を占めていますが、多くの製薬企業においては、研究開発や世帯に普及させるための臨床試験や新薬開発モデリナの研究開発が幅広く展開されてきており、当社はCRO (Contract Research Organization) 医薬品開発受託機関)として確立されています。当社グループ内における大規模製薬の業績(併給体制)や新薬開発モデリナ(併給)に有利な体制の構築が顕著に貢献しています。国内外から大型試験の受注とつながっています。

前期末の受注高は前年度比46.6%増の223.9億円に過去最高を記録することができました。特に、新薬開発モデリナの開発受注高は前年度比115.5%増の109.0億円に過去最高となり、1.4億円(受注:4.9億円、アリア:17.5億円)となり、海外受注高比率は27.5%と前年度の20.5%から大きく伸びています。私は、1991年に社長に就任以来、30年以上にわたって、独自の成長戦略に基づいて様々な施策を実行してきましたが、これらのおかげが実を結びつつあると手ごたえを感じています。

配当は、2022年3月期は過去最高となる1株当たり40円配当を実施しました。

COVID-19(新型コロナウイルス感染症)に対するワクチンや治療薬の開発にもCROは貢献しているのですか。

新薬開発は、基礎研究の前臨床試験段階から臨床試験段階まで10年以上の長い期間が必要で、この間、「スピード」と「確実性」を両立させることが重要となります。近年、海外を絡めて製薬企業では、豊富な経験と実績に裏付けられたCRO(研究開発)企業に委託する傾向が強くなってきています。CROは多くの医薬品開発経験を通じて確かな技術による高い信頼性を構築し、豊富な人材リソースによりスピーディーで効率的な試験を実施できます。COVID-19のワクチンや治療薬もCROの協力なしには開発できなかったでしょう。

新年度、2023年3月期の見通しと今後の方向性についてご説明ください。

2023年3月期も引き続き主力のCRO事業は好環境が継続すると見込んでおります。売上高、営業利益ともに27.5%増を予想しており、経常利益も為替の影響を軽減したことで27.5%増を予想しております。CRO事業では、施設拡張や研究スタッフの増員を進めるとともに、顧客利益の最大化を図ることで業務の効率化やDX(デジタル化)を進めてまいります。

SNBL
アカデミー

永田 塾

XUP活動

社長メッセージ

当社の2021年度(2021年4月～2022年3月)の活動内容をお伝えする「株主通信(日本語版、英語版)」を作成し、当社ウェブサイト上に掲載しました。新日本科学の「会社案内」を兼ねる内容になっておりますので、株主のみならず、当社の関係者、あらゆるステークホルダーのみならず、あらゆるステークホルダーのみなさまもぜひご覧ください。冒頭の社長メッセージ、事業紹介としてCRO事業、トランスレーショナルリサーチ事業(TR事業)、メディポリス事業(社会的利益創出事業)の3事業セグメントの紹介、社外からの評価として2022年3月に女性活躍推進に優れた企業として経済産業省と東京証券取引所が共同で主催する「令和3年度なでこ銘柄」に選ばれたこと、及び経済産業省と日本健康会議が共同で認定する「健康経営優良法人 ホワイ500」に6年連続で選ばれたことを紹介しています。特に注目していただきたいのは、SDGs/ESGの紹介ページです。最近、企業に人的資本の価値を向上させる一連の取組み(人的資本経営)の情報開示を求める動きが盛んですが、当社は人材育成について、社会的注目度が高まるかなり以前から積極的に実践してきました。当社独自の人材育成制度である「SNBLアカデミー」と将来の管理職/経営者を育成する「永田塾」、若手ビジネススキル向上を目指す「XUP活動」を図や写真入りで紹介しています。当社では、「私も幸せ、あ

SDGs/ESG

独自の人材育成制度”SNBLアカデミー”ご紹介

近年、ESG(環境・社会・ガバナンス)の観点を中心としたサステナビリティ経営や、長期的な企業価値の向上に繋がる人材育成の重要性が世界的に高まっています。特に、人的資本情報の開示については、日本政府でも開示フレームワークの議論が進んでおり、自社の人材や人材戦略がどのように経営戦略の向上に繋がるのかについて、企業がわかりやすく具体的な情報を開示することが求められています。そこで今回のSDGs/ESGヒストリクスでは、当社独自の人材育成制度である「SNBLアカデミー」と「永田塾」をビジネススキル向上を目指すXUP活動についてご紹介します。

SNBLアカデミーとは

当社は、人材と他社との差別化を図り企業価値の向上を実現するための源泉と捉え、個々の社員が自律主体的に成長できる職場環境の構築に注力しています。特に2022年に新設したSNBLアカデミーでは、社員への企業理念の浸透と「Transformation」を目的とした独自の社内研修を実施しています。新入社員から将来的に経営幹部候補まで幅広い人材を育成する専用のプログラムを開発しています。今回は、当社独自の教育活動である「永田塾」と「若手社員育成プログラム」についてご紹介します。

永田塾

今年度より導入された永田塾は、将来の経営人材育成を目的として、毎年10名の選抜された若手社員を対象に、経営者マインドの醸成、企業理念の浸透を主目的として、永田社長が直接指導します。1年間、将来の経営幹部候補として育成する社内研修プログラムです。4名から6名のチームごとに課題を与えられ、そのチームに基づいて塾生が現社長の指導、改善策の提案とその実践に取組む活動を行い、3か月毎に塾生と社長との自己対話の機会を行い、意思疎通を促進し学びが与えられます。活動形式は、毎年6月中旬に実施の研修です。これまでに12名の塾生が誕生して卒業しました。卒業後は、塾生の一人ひとりが経営者や経営者マインドを養い、普及と伝播に努めています。

XUP活動

2003年にスタートしたXUP活動は、年長の若手が年少者を指導している旧態着の「師匠と弟子」の関係をモデルとした若手育成プログラムです。入社1～3月の社員が6名前後のグループに分かれ、各グループのリーダーが設定した目標の実現に向けて活動し、自ら考え、自ら行動することで、自律主体的な行動力を持つリーダーの育成に貢献しています。XUP活動では、グループ活動を通して、コミュニケーション力、判断力、課題解決力、行動力、発想力、企画力を鍛えたいという若手社員が、様々なスキルを磨いています。毎年6月に発表会があり、活動報告を役員で行い、優秀チームを表彰します。これまでの成果として、新人教育の手引書の作成、実習生の手帳制作、生産現場でのやりとり(事例)の共有(労務院)、コストセンター間の業務連携の向上といった事業改善が実現され、実際に企業の実務スキルと社員のコミュニケーションの向上に貢献しています。

こうした社内教育の取組みは、当社の企業理念である「人材社会の財産である人材として大切にすることを実現するもの」であり、一層の特長は社長と社員との距離感が近く、当社社員にとって社長は自身の成長を応援してくれる最も身近な存在の一人であることです。これらが当社が社員の個人成長を支援し、持続的な企業成長に貢献する一環として実施している活動です。

SDGs/ESGの紹介

新日本科学の事業領域

人材 生命 環境

【CRO事業】
医薬品開発受託機関として、製薬企業からの受注に基づいて、臨床試験や新薬開発モデリナの研究開発を実施しています。国内外から大型試験の受注とつながっています。

【TR事業】
トランスレーショナルリサーチ事業として、製薬企業からの受注に基づいて、臨床試験や新薬開発モデリナの研究開発を実施しています。国内外から大型試験の受注とつながっています。

【メディポリス事業】
社会的利益創出事業として、製薬企業からの受注に基づいて、臨床試験や新薬開発モデリナの研究開発を実施しています。国内外から大型試験の受注とつながっています。

【Power generation business】
電力事業として、再生可能エネルギーの発電事業を実施しています。

【Fishery business】
水産事業として、持続可能な漁業の実施を実施しています。

新日本科学の事業領域

CRO事業

製薬企業のグローバルパートナーとして、新薬開発の力を支えています。

製薬企業からの受注に基づいて、臨床試験や新薬開発モデリナの研究開発を実施しています。国内外から大型試験の受注とつながっています。

TR事業

独自の製薬開発と基礎技術を応用した、製薬企業の開発が日々進んでいます。

独自の製薬開発と基礎技術を応用した、製薬企業の開発が日々進んでいます。

メディポリス事業

最先端医療技術の応用と社会貢献を推進しています。

最先端医療技術の応用と社会貢献を推進しています。

社外からの評価

女性活躍企業の証「なでこ銘柄」取得!

女性活躍企業の証「なでこ銘柄」取得!

健康経営を実践「ホワイ500」6年連続認定!

健康経営を実践「ホワイ500」6年連続認定!

社外からの評価

女性活躍企業の証「なでこ銘柄」取得!

女性活躍企業の証「なでこ銘柄」取得!

なたも幸せ、みんな幸せ」というスローガンを掲げ、すべての社員や関係者が輝きながら成長でき、その能力を十分に発揮できる企業風土を醸成することを目指しています。2022年4月に当社は東京証券取引所の市場区分見直しに伴い、プライム市場に移行しました。2022年8月17日には企業価値をあらゆる時価総額が1,000億円を超えました。プライム市場の名に恥じないように、引き続き世界規模での成長を目指し、業界ダントツのCRO実現に向けて、みなさまに寄り添う活動を続けてまいります。

IR広報統括部
岩田俊幸 Toshiyuki Iwata